アイデンティティの確立と教育

一 エリクソン理論を手がかりとして 一

古 山 良 平

はじめに

昨今,青少年の無気力や暴力,非行・犯罪・自殺等が新聞の社会面を賑わし,大きな社会的 論議を呼んでいる。具体的には子供の登校拒否や,大学生の長期留年等の無気力。家庭内暴力 や校内暴力等の暴力。薬物乱用や暴走族・売春等の非行。万引き・放火・殺人等の犯罪。そし て児童生徒の無雑作な自殺等である。

彼らに共通しているのは、殆んど皆が受験体制に駆り立てられた<受験生たち>あるいは <受験生予備軍>であり、豊かな社会を背景にして表面的には育ちが良く鷹揚で、凶悪な犯罪 者のイメージからは程遠いということである。彼らは普段は目立たぬ「いい子」として通って いるだけに、彼らの突然の(あるいは蔭に隠れた)逸脱の動機や心理は、大人には不可解に映 ることが多い。

そこで本研究の第一の目的は、教育活動の一環としての生徒理解に資するものとして、青少年の逸脱の動機や心理のメカニズムを、エリクソンのアイデンティティ理論を分析枠組みとして用いて解明することにある。

また第二の目的として、エリクソン理論の中核であるライフ・サイクルの8段階説の、誕生から青年期までの5段階における自我の発生的解明を詳述し、そとから一方における生物学的存在としての人間と、他方における社会的世界の現実との間の相互作用を主体的に有意味に総合する自我機能、その自我機能の発達論的危機の表出として、換言すれば、「個人の自我総合と彼の所属する共同体の生活設計との一致」というペアイデンティティン形成の各発達段階における挫折の表われとして、青少年の逸脱の動機や心理のメカニズムを解明する。

そして第三の目的として、アイデンティティの確立に必要なライフ・サイクルの各発達課題の達成が、いかに精神一身体的、対人関係的、社会・文化的、歴史的な多次元的存在としての人間の、世界構築作用とその世代循環による維持、そしてそれら両者の過程における相互依存関係(エリクソンの言う<相互性>)に依拠しているか、そして更にミクロのレベルにおける各発達課題を自覚した、お互いの愛と信頼に基づいた応答関係という真の<相互性>に依拠しているか、が強調される。そこから青少年の逸脱の原因が、現代社会や教育における<相互性>の欠如と大き〈関連していることを論じ、最後に<相互性>を回復させるための教師のあるべ第波社会科研究第1号 1982年 -51-

き態度を論じるのが目的である。

一 エリクソンに至る精神分析的自我心理学

精神分析的な精神発達理論は、フロイトの幼児性欲理論が、性的欲求を抑圧したり反動形成したりする、いわゆる自我の防衛に関する理解を含蓄していたことに始まる。アンナ=フロイトはこの自我防衛機制の発達を、児童分析の観察を通して明らかにした。精神分析的な精神発達理論の特質は、対象関係の理論とも呼ばれるように、その発達過程で主役を演じる欲求が、人間が人間に向ける対人関係的な欲求であるということである。フロイトにおいてはまだ生物学的志向のために先天的な生物的素質の漸成的開花のみを強調していたが、対象関係や対人関係への注目が、先天的・生物学的な内的成熟と対人的環境、即ち社会・文化的環境との相互作用として理解する、エリクソンの自我同一性(アイデンティティ)の発達に関する理論や、家族集団の中の対人関係に焦点を合わせたアッカーマンの家族力動論等を生んだ。

さて、精神分析的自我心理学の大きな課題として次の二つがあげられる。つまり、一つには、フロイトが研究した神経症や夢についての心的機能と、健康な状態におけるそれとを連続的にとらえ、精神病理学と心理学とを統合する理論と方法とを確立すること。そしていま一つは、フロイトの解明した無意識の心理機制を人格全体の中に適切に位置づけし直すことである。

そして精神分析的自我心理学の特質として次の五つがあげられる。つまり、① 生物主義 に根拠を置いていること。 ② 適応論的見地と発達論的見地が基本となっていること。

③ 母子関係を重視していること。 ④ 自我の成立の発生的な解明。 ⑤ 乳幼児が対象となっていること。以上の五つである。

二 エリクソンのアイデンティティ理論

- (1) エリクソンの理論は、心理-社会的発達の各発達段階の継起を概観し、これらの各発達 段階を精神一性欲的漸成的発達に関連づけ、この関連づけを介して、自我の漸成的発達 (ego-epigenesis) の研究の基礎づけを行なっている。そしてその自我の漸成的 発達の心理的基本構造には、心理-社会的課題・人格的強さ(活力)・儀式化の三つの側 面がある。
- (2) エリクソンは、誕生から死までの自我の行方を歴史的・社会的世界において追求し、人間の生活段階の推移をライフ・サイクルと名づけ、それぞれの年代の発達上の課題を明ら

かにした。そして各発達課題の解決は、過去の各段階に準備され、それに引き続く各段階で さらに仕上げを得る。

- (3) エリクソンの理論は、平均的期待可能な環境への先天的な協調を前提としている。エリクソンの<相互性>(mutuality)という概念は、この協調の基本が発達途上の個体と人間的(社会的)環境との間のそれであり、しかもこの協調が相互的なものである事実を特に強調している。しかもこの相互性は、親子、師弟、夫婦等の社会的地位や役割の相補的な協調から、集団間、さらには世代間の相互的な協調まで、<人間世界>を維持してゆく上でのあらゆる面に亘っている。
- (4) 自我の発達過程は、同時に個体が共同体の一員として<社会化>されてゆく過程でもある。その社会化の過程において、個人の自我 ― 時間 ― 空間と共同体の世界観とを橋渡しするのが、共同体の制度化された伝統的な養育バターンであり、それは養育者の側からみたときこれを<しつけ>という。この養育バターンは、どっちつかずの不安を喚起するようなアムビヴァレンスの排除された一定の類型化された型式に整えられており、これが<儀式化>と呼ばれる。この儀式化は、共同体の世界観と個人の自我 ― 時間 ― 空間との<相互調整>という、相互主観性(intersubjectivity)の領域において生起することがらである。この儀式化があってこそ、個体は有意味な経験の不変性・連続性・同一性を信頼して、安定した自己感情をもてるようになる。それはまた、自分が社会から是認または受容されているという自尊感情(sense of selfesteem)であり、また安定感・信頼・自信などの形で意識される社会的自己意識でもある。そして儀式化の形式は、各文化によって異なっているという。
- (5) エリクソンは、人間の生物学的な器官様式の漸成的発達と、その段階特有な様式は、その本来の起源となった器官や区域から別な区域へと汎化され、機能の変化をこうむり、二次的自律性をもった自我装置、つまりその個体の行動様式となるという。そしてこの相互調整に成功すると、心理 社会的課題が達成され、人格的強さが得られる。
- (6) アイデンティティの定義について

「アイデンティティとは,個人の中核さらにまた,彼の共同体文化の中核に『位置する』 一つの働きであって,まさにこれら二つの同一性の一致を確立する働きである。 (1) あるいは「アイデンティティの感覚とは,人が成長し発達してゆく過程で抱く,自分自身と一体であるという感覚を意味しますし,また同時に共同体の歴史 — あるいは神話体系 — ばかりでなくその未来とも一体である,という共同体感覚に対する親和感をも意味します。 (2) 以上はエリクソンの定義であるが,日本のエリクソン研究者の要約では,それは「自我の心

理社会的統合能力であり,自分の自我は各発達段階を効果的に統合することができ,かつ社会的現実の中で有効に組織化された自我へと発達しつつあるという感覚と確信から生じている。(3) とか,それは「自分が特定の社会の中で是認される歩みを将来に向かって一貫して進めつつある,という展望と自己評価によってしっかりと認められた確認である。(4) という。そこから筆者は,簡潔に前出の「個人の自我総合と彼の所属する共同体の生活設計との一致」というように,アイデンティティの定義をまとめてみた。

(7) アイデンティティの諸要素について

エリクソンは,「成長途上の子供は,経験を支配する自分独自のやり方(彼の自我総合)が,〔自分の所属する〕特定の集団同一性の一成功例であるという自覚を通して,そしてまたその集団同一性の時間 —— 空間と自分の生活設計(life plan)が互いに一致し合っているという自覚を通して,生き生きとした現実感覚を獲得せねばならない。⁽⁵⁾ と言っている。

健全なパーソナリティーの成長は、各発達段階固有の、十分なくゆとり>(leeway)を宿した〈成全性〉(wholeness)を達成してのみ可能である。自我はその理想的状態においては、「自分が自分として一つの世界であるという全体感(sense of wholeness)、時間――空間の中心に自分があるという中心感(sense of centrality in space and time),自ら選ぶ選択の自由感(sense of freedom of choice)」(6)とを合わせ持っているという。

さて、先の生き生きとした現実感覚というアイデンティティの感覚は、三つの要素に細分するととができる。それらはそれぞれ、〈事実性〉(factuality)、〈現実感覚〉(sense of reality)、それに〈実在性〉(actuality)である。 事実性とは科学的に検証可能な一群の事実であり、人間の認知的側面を表わしている。次に現実感覚とは、factualな事実を主観的に(客観的な制度的イデオロギーの枠組を借りつつ)意味あるものとして統合する歴史的な感覚であり、多くの当事者に重大な出来事に関与しているのだという高揚した気分を与える、人間の情意的な側面である。そして実在性とは、参加によって相互主観的な世界の中で、現実に働きかけてrealtyの領域で得られた、共同体に共通の目標を実現してゆく弁証法的な世界である。

とのように、アイデンティティの一方の極である「共同体の世界観は、(他方の極である個々人の)五官で認識し一定の基準に基づいて整理した事実や数字に、また情意的に確められた経験に、そして他の人間との協同において確定された社会生活にと三重に基礎づけられてはじめて、現実を自明の真理として描き出す。⁽⁷⁾という。即ち、共同体の生活設計と所属

成員個々人の自我総合が一致して<相互的活性化>を受けて,はじめて現実を自明の真理として描き出すということである。

このことは共同体としての人間世界が健全に機能,そして維持されてゆくためには,共同体の構成員である個々人が共同体との関わりにおいてそれぞれのライフ・サイクル各段階途上の発達課題を,他者との相互的交渉において十全に達成することが必要であるということを意味している。例えば,乳児期の発達課題である基礎的信頼は,母親との<相互性>において,母親が彼女の発達課題である生殖性(いつくしみ・世話すること)(generativity)を発揮することによってはじめて達成されるということである。このように,それぞれのライフ・サイクルの各発達課題を抱えた所属成員同士の相互的活性化がなされ,各人の成全性が達成されてはじめて共同体としての人間世界は健全に機能,そして維持されてゆく。

それはまた、相互性の生起する<実在性>の世界であり、参加しながら最少の防衛的態度と 最大の相互的自己実現を可能にするような、他者との交わりの世界である。

このような相互性において達成される各人のパーソナリティーにおける<成全性> (whom leness)とは、「実り豊かに連合され、組織されるような諸部分の集合、しかも極めて多様 な諸部分の集合を含意するものである。……(中略)……それは一つのグシュタルトとして、 その境界が流動的に開かれている全的なものの内部にある,多様な機能や部分間の健全で,有 機的で前進的な相互性を強調するものである。 | 8 | 成全性は、個人の<社会化>の過程での共同 体の生活設計と個人の自我総合との相互交渉において、十分な相互性が生起するときに獲得さ れるもので、個人に主体的な生き生きとしたアイデンティティの感覚を得させる<ゆとり>を 与える。このゆとりは<自尊感情>の源泉でもあり、お互いが実在性の世界において最少の防 衛的態度と最大の相互的自己実現を果たすような、プーバーの言う<我と汝>(5)の人格的な応 答関係を可能にする。ここに介在するのが,<儀式化>という共同体の制度化された伝統的な 養育バターンであり、そして儀式化におけるお互いの人格の尊重、あるいはゆとりの尊重とい らルールの原型を、エリクソンは子供の遊びに求めている。子供は遊びにおいて、ある事態の 雛型を再構成して,失敗した経験を取り繕い,経験を支配することによって再び人々と共有し た過去についての見解をもとにして、未来を予測することができるようになるという。こうし て遊びによって<ゆとり>が回復した状態を<遊びの飽満>といり。そして二人以上の集団の ゲームにおけるお互いの<ゆとり>を尊重し合うルールを、<ゲームズマンシップ>(gaー mesmanship) という。 お互いのゆとりを尊重し合うということは、各個人が自己のポジ ションと役割を自覚しながら、ゲーム全体の状況を判断して、フェアプレイの精神でそれに対 応してゆくということであり、各個人が全体の状況の中での自己と相手の発達課題を自覚しな

がら、責任ある行動をとる、ということである。

さて、各発達段階において、<相互性>が欠如し、<成全性>が達成されない状態を、成全性に対して<全体性>(totality)という。全体性とは、「不安の増大に伴って必要になる、より原始的なレベルにおける再適応の試みであり、……(中略)……全く排他的であると同時に絶対的に包括的なもので、そこにおいては絶対的な境界線が強調されるところの一つのゲシュタルトをつくり出すもの」(10)だという。つまり、欲求不満耐性が低く、全てか無かという捨てばちな行動に走ろうとする自我の弱さのことである。

このようなくゆとり>のない全体性を宿した人々の人間関係においては、最少の防衛的態度と最大の相互的自己実現という十全な相互性は生起し得ず、逆にお互いのくゆとり>を侵害し合いながらもお互いにいつまでも自立できずもたれ合って離れずにいるという悪循環を繰り返えず、く誤った共生関係>(vicious symbiosis)に陥ってしまう。このような相互性の欠如した状態をエリクソンは<否定的相互反作用>(reciprocal negative reaction)と言っている。

そしてこのような人間関係の不活性化は、全体としての共同体(人間世界)の停滞や病理現象をもたらすようになる。例えば、自己の<生殖性>という発達課題を遂行できず、基本的なしつけをなおざりにして自分の満たされぬ生き甲斐を子供の受験に転嫁する。口やかましいヒステリックな教育ママの子供はいつまでも自律心や論理的な自己主張能力が育たず、やがて登校拒否や家庭内暴力等の歪んだ形で、懸命の自己主張をするようになる。

(8) ライフ・サイクルの8段階説(青年期までの5段階)

まず乳児期は口唇性の時期であり、何でも取り入れようとする乳児の取り入れ様式に対して母親は適時に適量を与え、乳児の不安をいつでも取り除いてやる。この母親による乳児の存在の是認と世話によって、乳児は世界に対する<基礎的信頼>を得、<望み>を得る。また不安を喚起するようなアムビヴァレントなものに対する、バランスのとれた<基礎的不信>を身につけることも大切である。この時期の相互性における様式化は、ヌミノーゼ的な対面と呼名による<承認の相互性>であり、これによって乳児は分離されていることを超越し、自己の独自性を確認される。そしてこの儀式化が相互性を失った<儀式主義>(ritualism)に陥いると、真にヌミノーゼ的なものに対する畏敬の念をおべっかに変えてしまう、とりつかれて常習的な<偶像崇拝>に転落する。

次に、早期児童期は肛門性の時期であり、所有物に執着したり急に放り出したりする矛盾した把持 — 排泄様式に対して、思慮分別のある親的な人物は共同体の市民として正当な < 善悪の識別>をしつけ、法的な秩序に対する感覚を養わせる。ことにおいて、排他的な選民意識に

基づくく自己中心的宇宙観>を宿す、〈擬似種族化>と、自己の〈肯定的アイデンティティ>を維持するための必要悪としての〈否定的アイデンティティ〉の萌芽が見られる。つまり親は早くから、自己の文化内で認められた望ましい人種と望ましくない人種の類型についての区別を、子供に躾るのである。そして子供はこの矛盾した把持 ― 排泄様式を自分でコントロールできるようになると、〈自律感〉と〈意志力〉を得る。それに対して過剰なしつけの統制は〈恥と疑惑〉を招き、〈善悪の識別〉という儀式化も、規則にこだわる人間不在の〈律法主義〉に転落する。この時期は前エディブス期ともいわれ、母親の側の、子供の〈ゆとり〉を尊重した適切なしつけが子供の自律性を達成するのに重要な時期である。

次に遊戯期は、性器性の時期であり、想像可能な将来の役割予期の時代である。何でも思い 通りにしようとしたりまれをしようとする侵入 ―― 包含的様式に対して,基本的家族の人々は とっと遊びにおける将来の理想像の原型を呈示してやらなければならない。 また邪悪な役割に ついてもはっきり区別してやらなければならない。そしてそれらを是認や禁止という躾によっ て伝える両親の行動には矛盾があってはならない。そしてこの理想像の原型を<自我理想>と いい,まず最初は父親がその役割を果たすべきものである。そして,このごっこ遊びにおける 役割演技によって子供は将来の野心や目的についての現実主義的な感覚形成の基盤となるよう なく主導感>を発達させる。またこの時期はエディプス・コムプレックスの時代であり、子 供が基本的家族からより広い社会集団へ同化してゆけるかどうかの岐路でもある。つまり、幼 児性欲段階に入って性的なものに過剰な関心を抱くようになった子供に対して,親は性的な抑 圧を加える。そして子供は,近親相姦的な願望に対して深い<罪悪感>を抱くよりになる。そ んな時、同性の親との共通な理解可能な娯楽や仕事を通じての仲間意識の発達が、発達の段階 という点では不平等であっても、人間的な価値の点では基本的に平等であるという経験をさせ、 より広い社会集団へ参加してゆくきっかけとなるのである。そして他者と共有された行為の方 向づけとして、<目的性>が得られる。この時期の儀式化は、子供に社会への架け橋としての <中間的現実>を呈示してやる<演劇的苦心>であるが,親の過剰な抑圧は子供の罪悪感を増 大させ、それが歯止めとなって本気になれないニセの<役割演技>に転落する。

次に学童期は、幼児性欲が抑圧された潜在期である。それは人間に、身体世界、精神世界、物的世界を操る道具的可能性を与え、社会的責任を負い得るようになるまで性的・感覚的な面での発達を引き延ばす時期である。子供は今や他者との共同世界に参加して、空想や自分一人の遊びの時と、他者と共同の遊びの時の可能な内容の規準を発見するための学習が必要になる。そして次第に子供は、ものを作る(生産する)ととによって他人から自分の存在を認めてもらうことを知るようになる。学校では、現実の技術や経済にとって予備的な役割を、<仕事の規

則> (儀式化)を通じて子供に付与することによって、社会全体が子供にとって重要な存在となり、子供は義務や規律や仕事を共有することによって大人の現実界に参加したことを保証してもらおりとする。そこで得られるのが<勤勉感>と<適格さ>である。学校生活にはあくまでも大人社会との有機的な連結を保った、今やっていることに意味があるのだという
<現実感>がなければならない。この学校生活を通じて「自分はできる」という勤勉感が得られないと劣等感が生まれる。この時期の儀式化である。<仕事の規則>も形式にこだわるようになると、人間不在の<形式主義>に転落する。

そして青年期では、若者は急激な身体的成長と発達という自己内部の生理的な革命に直面して、自己の社会的役割を統合するようになる。若者は今や父母からの分離・独立という個別化を達成し、指導性のモデルから新しい社会的規準を内面化しなければならない。そして若者は、自己のいままでの諸経験(同一化群)を取捨選択して有意味に総合し、さまざまな役割実験の中から「これが本当の自分である」という職業を選択して大人社会にコミットしてゆく。その能動的な総合の核が自我同一性である。そして若者の信念を結束させ〈忠誠〉のエネルギーを引き出すのが地域社会の提供するイデオロギーである。そしてこの〈アイデンティティの確立〉がなされないと、(万過剰な同一性意識 (イ)選択の回避と孤立感・空虚感・麻痺 (ウ)対人的なかかわり合いの拒否と孤立 (知時間的展望の拡散 (分勤勉さの拡散 (分 否定的アイデンティティの選択等の〈アイデンティティの拡散〉に陥いる。この時期の儀式化は〈信念の結束〉であり、これによって青年は献身の枠組と行為の方向づけを与えられ、職業選択をして責任ある人格として大人社会へコミットするまでのモラトリアム期間を有意義に過ごすことができる。だが、これまでの各発達課題が十分に達成・統合されないと、狂信的で排他的な〈全体主義〉・〈選民主義〉に転落する。

三 現代社会病理としての青少年問題

青少年の問題を、彼らの社会化の過程での各発達課題の達成に関わる人々との<相互性>の欠如、さらに現代社会自体の<相互性>の欠如という視点から考察してみよう。

まず前者では、母子関係・父子関係の歪み、受験体制下の学校教育の歪みがあげられる。 核家族化・少人数化によって情緒的密着の強くなった母子の<誤った共生関係>的な癒着 は、前エディブス期といわれる早期児童期の課題である自律感の獲得がいつまでも達成され ず、意志力が育たない。「子供のために」と思い込み、自己の満たされない生き甲斐欲求を 子供に転嫁している過保護・過干渉的な教育ママに対して、親のロボットから脱却しようと する子供は、人格的な自律性を尊重された真の人間的な関わり合い(<相互性>)を求めて 依存(甘え)の裏返しである攻撃性を発動して,歪んだ自己主張を行なう。その表われが家庭 内暴力や登校拒否である。

そして彼らの攻撃性は、非論理的で社会性に乏しいが、それは彼らの父子関係の歪みからもきている。つまり父親の役割はエディブス期といわれる遊戯期において「抑圧」と「同一化のモデル」たることであり、男の子は攻撃者としての父親への恐れの故に同一化の対象を母親から父親に切り替え、父を同一化のモデルにすることによってエディブス葛藤を克服し、社会的・論理的なものへ眼を開かれてゆく。ところが現代は、父権喪失・中心性喪失の時代といわれ、価値観の多様化・官僚機構の中での労働疎外感などによる自信のなさ、また多忙や引き込もりの故の母子との接触の薄さなどから、父親が「社会への架け橋」という父親としての機能を果たさなくなってきている。そのためいつまでも子供は対立・抗争という第一次反抗期のエディブス葛藤を克服できず、前エディブス期の非論理的な母子の癒着にとどまっていることになる。近年問題になっている母子相姦も、この誤った共生的な母子の癒着が原因であろう。

さらに、現実社会の価値規範や経済の技術の<仕事の規則>を教えるべき学校教育も、受験のための断片的な知育偏重になっていて、子供同士の社会的共感能力が受験競争の敵という意識のために育たなかったり、押しつけの勉強を強迫的に反復するために、創造力や深くて柔軟な思考能力が育たなくなったりしている。人間性の多様な価値が認められず、暗記力にすぐれた成績の良い者だけが「良い子」とされて、その他の者は不必要に劣等感を助長されている。また受験のためということで、子供は自然の中でのひのひと遊ぶことが許されず、日曜日でも学習塾に通わされている子が増え、成全性の達成に必要な<ゆとり>が著しく欠如しているのが現状である。

次に、後者の現代社会自体の<相互性>の欠如について触れてみょう。

まず、都市化・工業化・核家族化が進んで地域共同体が崩壊し、核家族は稀薄な人間関係の中で社会との連帯なしに孤立し、家庭と社会をつなく家庭の父親的機能が後退した。次に高度大衆消費社会を現出させた資本主義的競爭原理は、受験戦争と結びついて協力よりも競爭を、精神よりも物質をの風潮を生み出し、人間や物との人格的応答関係を消失させた。その結果、官僚機構の中での労働疎外や、生態系のバランスを無視した自然の乱開発による公害等の環境不全問題をひき起こし、人間の営みによって人間がしっぺ返しを受けるようになった。そして映像や画像による視覚的なマス・メディアの氾濫は子供のバーソナリティーにも悪影響を及ぼし、子供は安易で受動的な直観的・感覚的な思考様式に陥り、擬似環境の増大によって空想性主観性が高くなり、冷静で客観的な現実検討能力が低下した。近年の万引き等の遊び型犯罪の流行は、受験でしめつけられた物質的・感覚的な子供の、政治汚職などによる遵法精神を尊重

しない大人世代への疑惑と相まっての,彼らなりの<ゆとり>を回復する遊びの機能を果たしている,と見ることができよう。

また、成績至上主義の受験体制の中で歪んだ母子関係・父子関係・さらに学校教育の中を通過してきた育年は、大学生になると「ステューデント・アパシー」と呼ばれる長期留年等の無気力症状を引き起こす。この原因は、母親への長期依存による自律性・目的性の欠如と、受験から解放された後の生き甲斐喪失、さらには社会への架け橋である自我理想としての父親不在のために、出てゆく社会自体が魅力あるものに映らないことと、職業選択をして責任ある人格として大人社会へコミットするまでのモラトリアム期間中に、積極的に役割実験を続行してゆく社会的行動力が育っていないこと等があげられよう。

総じて、社会に相互性の欠如する病理の根源は、近代主観主義の主観が客観を一方的にモノ化する真理認識にあるが、社会に相互性を回復するためにわれわれは各人が相互依存関係にある人間世界の一員であることと、愛と人格の尊厳の相互性を自覚し、また父母や教師の発達課題を自覚しながら「他人を強化する時でさえ自分を強化するものを他人にすることが一番であれる。という、エリクソンのいうく黄金律>を実践してゆきたいものである。

钳引用文献

- (1) E. H. エリクソン, 『 ガンジーの真理 』 星野美賀子訳 みすず書房 1974, P56
- (2) エリクソン, 『歴史のなかのアイデンティティ』 五十嵐武士訳 みすず 1979 PP.30-31
- (3) 仁科弥生,「『幼児期と社会』解説」 (エリクソン『幼児期と社会2』 みすず 1980所収 P.220)
- (4) 鑢幹八郎「『自己同一性』に関する若干の考察」 (鑢幹八郎,上里一郎共編『自我同一性の病理と臨床 ―シンポジウム青年期 I ― 』 ナカニシャ出版 1979 所収 P.21)
- (5) エリクソン, 『自我同一性』 小此木啓吾訳編 誠信書房 1973 P.9
- (6) エリクソン, 『洞察と責任』 鑢幹八郎訳 誠信書房 1971 P.149
- (7) エリクソン, 『歴史のなかのアイデンティティ』 五十嵐武士訳 みすず 1979 P.100
- (8) エリクソン, 『アイデンティティ』 岩瀬庸理訳 金沢文庫 1973 P.98
- (9) ブーバー, 『孤独と愛 我と汝の問題 』 野口啓祐訳 創文社 1958 P.1
- (II) エリクソン, 『アイデンティティ』 岩瀬庸理訳 金沢文庫 1973 PP. 98-99
- (1) エリクソン, 『洞察と責任』 鑢幹八郎訳 誠信書房 1971 P.240

参考文献

エリクソン『青年ルター』, 大沼 隆訳 教文館 1974

『エリクソン vs, ニュートン』 近藤邦夫 みすず書房 1975
 Erik. H. Erikson, "Toys and Reasons" Norton, New York, 1977
 小此木啓吾, 『人類の知的遺産・フロイト』 講談社 1978

『現代精神分析2』 誠信書房 1971 岩井 寛・福島 章編集『現代臨床社会病理学』 岩崎学術出版社 1980 瓜生 武他『学校内暴力・家庭内暴力』 有斐閣新書 1980 遠藤辰雄編『アイデンティティの心理学』 ナカニシャ出版 1981 笠原 嘉他編『青年の精神病理1』 弘文堂 1979 福島 章『甘えと反抗の心理』 日本経済新聞社 1976